

チャレンジ講座（文系第7回）を実施しました

1月16日（水）に第7回文系チャレンジ講座が、本学教育学部の藤野陽生先生を講師に迎え、「障害」は「害」なのだろうか？というテーマで行われました。

遠隔配信された臼杵、高田、国東、中津南、日田、竹田、別府翔青、大分雄城台、大分商業、大分鶴崎、三重総合、大分西、中津南の計13校241名が受講しました。

先生は始めに、障害・障碍・障がい（大分県ではこの表記）・ハンディーキャップのある人・特別な支援の必要な人



など「障害」をめぐる様々な言葉と言説について述べられ、2016年の朝日新聞の記事から抜粋した資料

（「障がい」に「害」の字をなぜ使うのか）を参照しながら、高校生たちがどのように思うか問いかけられました。

つぎに、学校教育法における「障害」である視覚障害、聴覚障害などの説明をした後、仮想的な事例をもとに、自分が「障害」を持つことになったらという状況を例示されました。その例をもとに、「では、障害とは何だろうか？あなたがたは何を感じますか？」と、遠隔配信された各高校の生徒たちに質問をされました。「害ではなく、個性である」「同情されている気持ちになる」「違和感がある」

「大切なのは言葉ではなく、気持ちが大切である」「映画館での値引きはどうなのか」「そもそも、障害者とか健常者といった線引きは必要なのか？」「障害をなくそうという考えは、人の個性をなくそう、無視しようとする行為なのではないか」「すべて個性なので、普通の人と同様に接することが大事なのではないか」などの高校生の活発な意見が寄せられました。藤野先生が参加校の15名の生徒とのコミュニケーションを積極的に図りながらの講義であったため、講義後のアンケートに「色んな学校の生徒や大学の先生と、たくさん意見交換ができてとても良かった」と書かれたものが多く見受けられました。

最後は、障害のある幼児児童生徒の自立や社会参加に向けた主体的な取り組みを支援するという視点に立ち、一人一人の教育的ニーズを把握し、その持てる力を高め、生活や学習上の困難を改善又は克服するため、適切な指導及び必要な支援を行う「特別支援教育」についてでした。高校生から、「障がいの有無に関わらず、すべての人が同じ教育を受けるべきだと思ったので、どうしたらそれが実現するのかをこれから考えていきたい」という意見が寄せられました。

講義後のアンケート調査では、「総合的に判断して授業がよかった」（99%「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」の合計。以下同じ）、「教員は真剣に取り組んでいた」（100%）、「受講生は授業に意欲的に取り組んでいた」（98%）という結果でした。遠隔配信については、「音声はよく聞こえた」



（93%）、「映像はよく見えた」（96%）という結果が出ました。